

### 3 錨鎖鍛冶

さあ見よ ドルフィン号の錨鎖造りを 今まさに白熱の最中  
 輪は停止し 火の勢いは小さくなったが 炉の上部では  
 小さな火焰が未だ赫々と漆黒の石炭の山の中で燃え立ち  
 煌めく時には厳めしい鍛冶職人たちの仕事ぶりが見えよう  
 全身革の防護服を身に着け 大きな手だけがむき出し  
 大槌に寄りかかる者や 揚錨機を動かす者もいる

5

揚錨機が滑車装置の鎖を引く 黒い石炭の山はその下で膨れ上がり  
 創造の発作を起こしては 無数の深紅の火焰がどくどくと脈打つように浮き出る  
 炭山は隆起し轟音をたて 即座に炸裂 おお神匠よ なんとという輝きだ  
 目が眩むほどの白光と 爆発の勢いさながらの光輝は 高みの太陽にも劣らぬ  
 太陽とて地上でこのような恐ろしい火焰の見世物を目にするのではないだろう  
 黒い天井の肋材に 白く輝く熔炉 そして真っ赤に染まった鍛冶職人たち

10

列をなして立ち 熱気を帯びた集団は まるで敵を前にした兵士のよう  
 眼前には火焰に包まれた 軀を震わせながら海を行く敵なる怪物が ゆっくりと  
 鉄床の上に腰を下ろす 周りを囲む職人たちの顔はみな赤々と輝いている  
 「やあっ 跳ねろ 跳ねろ」ガンガンと巨大大槌が鳴る

15

やあっ 吹き出す電光があちこちでシュッシュと音を立てる  
 勢いよく大槌を打ちつけるたびに 雨あられと火焰が噴きあがる  
 革の鎧がその火の粉を跳ね返し 燃え殻が音を立てて  
 床に散らばる 火の粉が跳ね返るたび 茹だるような暑さに汗が噴き出す  
 汗だくになりながら男たちは 一打ごとに「ホッ」と大声をあげる

20

跳ねろ 跳ねろ わが熟練工たちよ 跳ねろ そしてしっかり打て  
 立派な錨鎖をこしらえよう どでかい船首錨を  
 船舶の心臓がこの一撃一撃にかかっているのだ  
 立派な船が荒れ狂う波を超えていくのが見えるようではないか

25

風下には暗礁が待ち構えている 次々と押し寄せる荒波に  
 船全体が 海水を被り 大槓は折れて海に落ち  
 舷牆は崩れ 舵はなくなり ボートは鎖で大破した  
 だが希望を持って 勇敢な船員たちよ 船首錨はまだ無事だ

30

あいつは全くびくともしない 船が傾き空高く突き上げられる時は別にして  
 錨鎖はその頭を動かし 囁いているようじゃないか「恐れるな 俺がついている」と  
 鍛冶職人たちよ 規則正しく大槌を打て 手足のリズムを保て  
 お前たちの鍛冶はどんな教会の鐘よりも甘美な音を奏でる  
 そして 大槌を休めている間は歌え 合いの手を入れよ

いかり かなとこ  
錨鎖が鉄床の王ならば 俺たちは王に仕える職人 35

打て 打て 轟々という赤い火花の勢いが弱まるぞ  
ハンマー  
大槌の響きが高くなるのは 仕上げが近い証拠  
いかり ふしど  
錨鎖はまもなく燃え盛る華麗な火の臥所から移されるのだ  
轟音を上げる舳先の吊り床へと あるいは海底の泥土の寝床へと  
いかり  
錨鎖はまもなくここにいる陽気な職人たちの歌を離れ 40  
船員たちの「えんやこら」「よいと巻け」というかけ声に迎えらるのだ  
出帆の夜 別れを惜しむ船員らはゆっくりと錨鎖を揚げ 愛しい家族から遠く遠く離れていく  
むせび泣く恋人たちは列になって いつまでも海の泡を見つめ涙を流す

いかり  
ついに青黒く不気味な暗がりの中へと 錨鎖が沈みゆく  
ちようびようか  
吊錨架から投げ込まれたもののなかでも とりわけ立派で頑丈な錨鎖 45

いかり  
おお 頼りになる心強い護衛よ もしお前が俺のように生命を持っていたなら  
お前の仕事は碧く深い海底で何物にも代え難い喜びをもたらすことだろう  
いのち  
おお 深海のダイバーよ お前と同じような光景を目にできる者がいようか  
ボセイドン  
白髭の海神の宮殿だ さぞ楽しいことだろう  
真っ逆さまに飛び込み 鯨の群れへ混じっては 50

おびれ  
鞭打つような尾鰭の下 身をもって激しく泡立つ水の勢いを感じるのは  
イッカク  
深く鬱蒼とした海草の森では 獐猛な齒鯨と戦い  
象牙色の角をもものともせず 呻きを上げさせ撃退するのは  
つるぎ めかじま  
頭に硬骨の剣を持つあの油断ならない眼旗魚をお前は絶望させ  
そして尖った歯をむく恐ろしい鮫には その顎を一笑に付してやるのだ 55

クラークン  
ノルウェーの島々の間を行けば 海の怪物の背中にぶち当たる  
そいつが急に浅瀬になっている辺りに巨体を預け眠っているから  
だが衝撃でついには海中火山のように鼻を鳴らし海底へと転げ去っていく  
クラークン ごまふあざらし  
一方で お前の進水の勢いは 海の怪物の背中をつついてきた胡麻斑海豹の  
遠くで驚くその群れに大きな波を立てるのだ あるいは偶然 60

ウンディーネ  
貝殻が散らばり 古くから水の精が愛する神聖な入り江で  
長い髪の人魚を見つけたり 凍りついた島々のすぐ近く  
紺碧の砂の上で海蛇と格闘したりするのだ

フィッシャー  
おお 鎧に包まれた深海の捕魚性動物よ お前の戯れに匹敵するものなどあろうか  
ケーブル  
船舶ドルフィン号はお前に繋がれた太綱で千トンもの重量を引き揚げるのだ 65

ゲーム  
お前の夜毎の喜び 日毎の栄光は 壮大な遊戯を楽しむこと  
それに比べて人間の戯れなどちっぽけなもの 先ほどの失言を許したまえ  
フィッシャー  
捕魚性動物の喜びは捕ることだが お前の任務は救うことだ  
おお 海王の館に住まう者よ お前がわかれば何とする 70  
傍らに転がる白い骨が誰のものか 濡れた亡骸の中にはいったい誰がいるのか  
彼らほうねる波にゆっくり揺れながら お前に纏わり付き  
まるで夢の中で白波砕けるようなかすかな音を立てて 旧友を祝福している

おお どんな英雄がより大きな歩みで辺りを漂っているか お前が理解できたなら  
その鉄の脇腹は誇りで膨れ上がるだろう お前は海中で踊りあがるだろう 75  
喜びの岸を永遠に後にした英雄たちの記憶を讃えよ  
故国への愛のために血を流すことを厭わなかった彼らに  
静かな余生と草の生い茂った教会の墓地を望まず  
絶えず揺れ動く波間の休息なき床に安住することを選んだ彼らに  
おお 色々な事どもをうたってきたかもしれないが 80  
英雄たちの記憶のためにこの<sup>いかり</sup>錨鎖を讃えよう 彼らの亡骸の間を通りゆくこの<sup>いかり</sup>錨鎖を

(三木菜緒美訳)